

☆新春初夢企画☆

魅せられて

～水と緑と駅前広場が魅せる庭園都市～

■「オー ビューティフル！ザッツ ニッポン！」

岡山駅後楽園口に降り立った訪日外国人は目を丸くし興奮が収まらない。駅舎を出ると目の前に、緑が目映い日本庭園が広がっているのである。驚きを隠せないのは外国人ばかりではない。数年ぶりに出張で岡山に訪れた邦人サラリーマンまでも、駅を降り間違えたのかと焦ったというのである。

それも無理はない。数年前までこの駅前広場は、開放感さえあったものの、路線バスの乗降場が目の前に広がり、右手にタクシー乗降場、そしてはるか向こうに路面電車の停留所が見える何の変哲もない、むしろ交通結節点としては人の流れの導線的にも機能性の低い駅前広場であったのである。そんな駅前広場が生まれ変わった日本庭園広場から市内中心部に向かう路面電車がひっきりなしに出入りしている。線路の周りにも芝生が敷かれ、このグリーンカーペットは後楽園まで続いており、観光客のおもてなしの役割も果たしている。

■岡山の主たる公共交通である路線バスも、この日本庭園広場から発着している。そこには緑の芝生と木々、所々に起伏があり石もある。そしてバスレーンを水路に見たて、まるで後楽園がそのまま駅前に現れたようでもある。路線の方面別ごとに整備された停留所からバスが次々と発着し、スムーズに流れゆく風景は、まるで後楽園の流店である。動いているものや、流れに乗ってみたいくなるのが人間の性。この庭園を流れる水路はどんな所を流れていくのであろうか。どんな所に流れつくのであろうか。知っている者でさえも乗ってみたいとなる。つまりこの日本庭園広場そのものがテーマパークとなり、そこに出入りする乗り物は、アトラクションとなるのである。今やネット社会。この光景を世界中の人達に発信する事が出来る。魅力的な駅前広場は、そこを発着する乗り物さえも、魅力的にするのだ。

やがて発着するバスのほとんどが電気バスとなり、この日本庭園広場に今以上、爽やかな風が吹く事であろう。

■この日本庭園広場で最も絶景ポイントは、停車中の下りの新幹線の車窓から、又はプラットホームから見下ろした風景である。その美しさは今まで岡山駅を通過していた人達や乗り換えとして利用するだけの人達が、改札口を飛び出したくなるのである。また途中下車する時間がない人達にも、次はこの駅で降りようと思わせるのである。

初めて来岡の方や観光目的のお客様の場合は先ず後楽園に向かう人が多いかもしれない。

しかし旅先での楽しみは食事やお土産もある。日本庭園広場近くなら天明元年創業（1781年）で、内田百閒著の「阿房列車」にも出てくる老舗レストランがある。席によっては日本庭園広場を眺望しながら食事を楽しめるかもしれない。お土産なら西川河畔にある岡山の台所がある。人情味溢れる岡山を肌で感じる事が出来る市場だ。そしてこの2か所を結ぶ280mの商店街にも魅力的な店は多い。何よりもこの辺りの魅力は駅からの歩行者導線が良いのは勿論、路面電車の停留所が3か所もありアクセスが抜群に良いのである。

■2020年。東京五輪が開催される頃にそんな岡山の風景があれば嬉しく思う。今の岡山の街はもったいない。数えきれないほどの魅力があるにもかかわらず、それを表に出さず隠しているようにも思える。まるで表が白飯、底には豪華な具材を隠す岡山のばら寿司である。

しかし今ではそのばら寿司も具材が表に堂々と見えている。今こそ保守的な気持ちを、ばら寿司の如くひっくり返そう。そのひとつが路面電車駅前乗り入れ実現でもあるように思う。たった150メートル。されど150メートル。人々によって思いはそれぞれだろう。しかし県都岡山の玄関口が岡山駅である事は否めない。この岡山駅前こそ最重要交通結節点なのである。

私は信じている。路面電車駅前乗り入れと魅力的な駅前広場を整備の実現こそが、人が集まり、活気づき、来る人も住む人も生き生きした街になるチャンスの1つである事を。

岡山の街に「魚島どき」が来る事を。

(安藤 亮)

NPO 法人公共の交通ラダ(RACDA)

事務局 〒700-0823 岡山市北区丸の内 1-1-15 禁酒会館 3F TEL&FAX 086-232-5502

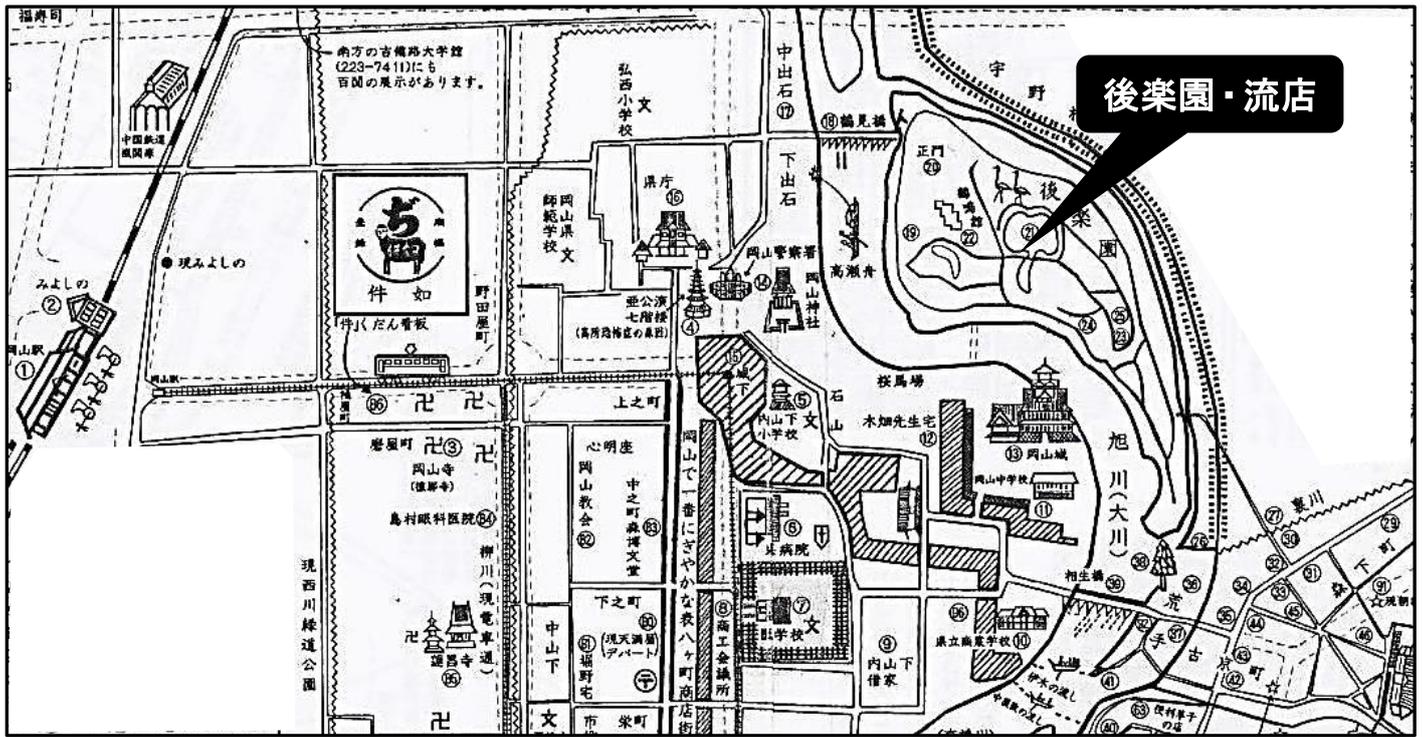
E-mail: info@racda-okayama.org

URL: http://www.racda-okayama.org

RACDA

検索





内田百閒望郷の道地図 明治後半頃の岡山市中心街と後楽園の地図（作・岡将男）を抜粋。

明治22年山陽鉄道が開通し、当時の中心街から外れた田んぼの中に岡山駅が出来た。一方岡山藩主の庭園「御後園」は、明治以後岡山県が買い取り、市民に開放されて「後楽園」となった。岡山城・後楽園周辺は市民の憩いの場となり、明治25年には「亜公園」という一大レジャーランドも開業。亜公園には浅草十二階を真似た七階楼がそびえており、劇場、旅館、食道、ゲームセンターもあった。高所恐怖症の内田百閒の父親が、足がすくんで降りられなくなったと言う。

岡山城を囲む外堀は明治30年代から40年代にかけて埋め立てられ、明治中頃から続く京橋の夏の名物イベント「奈良茶」に対抗して、西手櫓の下では「上之町納涼園」が開催された。同様の納涼市が西川でも開催され、奈良茶ともども全滅する。実は京橋朝市は奈良茶の復活でもある。

路面電車はまず後楽園までが開通

路面電車は明治45年5月5日に内山下線910m(岡山駅前—御城下)と内山下支線448m(御城下—後楽園)が開業した。さらに6月1日には城下—西大寺町が開業し、当初はT字型路線であった。運賃は4銭だったという。ほぼ同時期に開業した西大寺軽便鉄道が後楽園まで来ていたので、連携すれば、路面電車は岡山から西大寺アクセスルートの一部を担っていたようである。西手櫓前の広い堀を埋め立てて敷設されている。路面電車の開通はまさに中心市街地への回遊性確保と交通結節点改造を行ったわけだ。

後楽園の芝生と流店

後楽園は池田家の庭園として1700年に完成したが、当初は芝生が全面に敷かれていたわけではなく、畑が多かった。しかし現在では芝生と流水のコントラスト、岡山城の姿とあいまって素晴らしい景観となっている。ゆったりした芝生は後楽園のシンボルだ。

流店は唯心山の東にある。水の流れを建物の中に取り込んでいて、流れの両側の板敷の間で曲水の宴を催すという風雅な場所だ。このあたりで内田百閒もよく遊んだという。この流店のデザインを岡山駅前の路面電車電停に取り込み、駅前広場に流水と芝生を表現すれば、城下町文化を大いにアピールできるかも。

駅前商店街への動線は後楽園・岡山城の城下町文化をテーマにデザインし、商店街飲食店街は岡山の美味しい「御馳走帖」（内田百閒のグルメ本）の世界を再現すれば、市民の台所・岡ビルの価値も生きてくるのではないか。（文責・岡将男）

